



奈良教育大学 広報誌
NARAYAMA
NARA UNIVERSITY OF EDUCATION'S
SEASONAL PUBLICATION

















CONTENTS

- 2 特集 奈良教育大学生の被災地支援 ~教育復興支援ボランティア活動報告~
- 6 羅針盤 職能成長能力を備えた教員を養成するための 先進的な取組
- 9 クローズアップ 文化財の絵画記録保存のため、その復元と模写に挑み続ける大山明彦准教授
- 12 なっきょん's CLUB企画 奈教のひみつ~学内に残る戦争歴史遺跡をたどる~
- 15 USE-MATCA JICA青年海外協力隊としてベナンで活動する中山千恵子さん
- 17 | ラボ・レター 体育教育学 高田俊也研究室
- 18 関学生レポート リヨン第三大学 (フランス) 高萩典子さん
- 19 世界の子どもにワクチンを―ペットボトルキャップから始まるボランティア―
- 20 ブカツ魂! 大学祭実行委員会
- 20 活躍する奈教生
- 21 キャンパスニュース
- 22 奈良に息づく仲間たち
- 23 | 奈教生に聞きました! 大学周辺のオススメスポット

表紙のはなし

第62回 輝甍祭(H23.11.4~6)

表紙写真は、右から大学祭実行委員会の教育学部2回生の近藤拓真さん、1回生の林尚美さんと藤尾彩夏さん。 今年で62回目を迎える本学大学祭、「輝甍祭」という名前が付けられています。これは、昭和50年に、校 歌の一節に「輝く甍…」とあることや「キボウ」が「希望」に通じることなどから、付けられたものです。

大学祭実行委員会の学生が主体的に企画・運営しており、子どもたちが参加できるイベントが多いのは、教育大学ならではです。もちろん装飾などは学生たちの手作り。学内の合宿所で夜遅くまで作業が続けられ、本番間近や本番中には泊まり込みで製作や運営が行われます。

(企画・広報室)



特集

奈良教育大学生の被災地支援

~教育復興支援ボランティア活動報告~

宮城県

平成23年3月11日に東日本沿岸部を襲った未曾有の大震災から数カ月、被災地の学校で授業が再開されるなか、被災を免れた地域との学力格差が懸念されています。

このような状況を少しでも改善しようと、本学では宮城教育大学教育復興支援センターと連携、被災地の学校において学習補助等を中心とした教育復興支援活動のために、学内で学生ボランティアを募集し、これまで2回に分けて現地へ派遣しました。今回は、第一次隊として8月1日(月)から5日(金)まで活動を行ったメンバーに、現地での活動の様子やそこから感じたことなどを報告してもらいました。



スケジュール

7月30日(土) 夜 京都駅より夜行バスで出発

7月31日(日)朝 仙台駅に到着、宮城教育大学にてオリエンテーション

8月1日(月)~3日(水) 七ヶ浜中学校生を対象に活動

実施場所・日時: 8月1日(月) 七ヶ浜町役場水道庁舎会議室(13時~15時)

8月2日(火)・3日(水) 七ヶ浜公民館(9時~15時)

活動内容: 3年生 自学自習支援(5教科)

8月4日(木)~5日(金) 古川東中学校生を対象に活動

実施場所・日時: 古川東中学校仮設校舎(9時30分~11時30分)

活動内容: 3年生 サマースクールの支援

8月5日(金) 夜 仙台駅より夜行バスにて出発

8月6日(土)朝 京都駅に到着





活動の方針をミーティングで明確化した上で

一生懸命伝えようとする気持ちが 子どもに伝わる

今回の活動にあたり、生徒に対してどのように勉強を教えようかということを話し合う機会が何度もありました。一生懸命伝えようとする気持ちが子どもには伝わるため、私たち学生の教えたいという気持ちが、子どもたちにとって必要だということを話し合いました。ただ、今回確かに学習支援ということでボランティアに訪れていますが、たった2、3日で今まで分からなかった勉強が分かったり、好きになったりということは現実的に難しい部分があります。それよりも、子どもたちが自分たちのことを心配してくれ



大学院専門職学位課程 教職開発専攻 1回生 ^{きのした}ともあき 木下 智彰さん

ている人がいると感じ、東北以外の 地域の人の話を聞いてさまざまな 思いを馳せ、今後の学習に気持ちを 向けさせることができるというの が最も大きい作用ではないかと感 じました。子どもたちに少しでも良 い影響を与えることができたので あれば非常にうれしいことです。

また、私自身もそうした活動を行うことができ、これから先、自分の中で確かな力としてあり続けると感じました。

「他者のことを考える」大切さ

「他者のことを考える」。私がボランティア活動を通して、最も重要だと学び、感じたことです。月並な言葉に聞こえるかもしれませんが、「できているようでできていないこと」の一つではないでしょうか。

現地で活動するにあたり、生徒と接する際にいつも以上に「生徒のことを思いやる」ことを意識しました。私の言葉が震災で負った心の傷を刺激するかもしれない、という不安があったため、常に言動には注意しました。また、私が発する一言一句がその生徒の心に届くよう、どう表現すれば分かりやすいか、どういうトーンで話せば生徒が聞きやすいか、ということに非常に気を遣いました。現地にいる間は特に感じなかったことなのですが、奈良に帰ってきた後、自分があの五日間、常に他者のことを考えていたことに気づきました。被災地だけで

なく、常に人のことを考え、行動・発言 していかなければならないと痛感した瞬間でした。

あの地震の直後、日本人は「人のことを考える」ということを無意識にしていました。それが全国で展開された募金活動に繋がり、多くの方のボランティア参加に繋がったのだと思います。それは紛れもなく思いやりの心であり、皆が人のことを考えている証拠でした。震災から六カ月以上経った今、その思いやりの心が心の片隅に追いやられてはいないでしょうか。私たちはもう一度、「人のことを考える」大切さを思い出すべきなのではないでしょうか。



教育学部学校教育教員養成課程 言語・社会コース 4回生 大阪府立牧野高等学校 え こ たくろう **江籠 拓朗さん**

「自分だからできること」を考えてみる

震災から5カ月近く経っていてもなお、まだまだ非現実的な景色は残っていました。この景色と経験を抱え、乗り越えながら生活している生徒たちや地域の方々とたくさん出会いました。しかし、考えても考えても、私には何も分かりません。あまりに大きすぎる悲しみや辛さや恐怖は、私には理解し難く、そのひと欠片も分からないことが、こんなにも虚しく悲しいということを初めて経験しました。

しかし分からないからといって、考え、行動することをやめてはいけないと思います。自分自身にとって何か大きなものに取り組むとき、大抵の人は「自分にしかできないこと」をしようとしている気がします。時にそれを探し出すことは難しく、機会を逃すこともあります。ただ、自分の体と心を精いっぱい働かせるだけでいいと考えると、できることはたくさん



教育学部学校教育教員養成課程 身体・表現コース 4回生 福井県立大野高等学校 とみ た あや か 富田 彩佳さん

あるのではないでしょうか。仮に、それが本 当に役立ったかどうか分からないにしても、 誰にも関係ないと思えることでも、その一つ ひとつの積み重ねが、誰かの手助けになるの であれば、それで十分素敵だと思います。

今回も、私は「自分だからできること」を考えてみました。今回の支援活動で、私だからできたと思うことは、生徒と一緒に考えることと休み時間のおしゃべり、それから自分自身の体調を崩さなかったことくらいです。こんなことでも、生徒たちの何か手助けになっているはず…と信じています。

私が実際に経験し、考えて得られたことは、 書ききれるほどではありません。今後この経 験をどう生かしていくのか、自分なりに考え、 実践していきたいです。

ちょっとした思い込み、常識だと思っている ことが、相手には常識ではないことがある

私が最初に七ヶ浜の中学生に会ったときの印象は、どこの中学生とも同じように見える、明るく元気な子どもたちだなというものでした。私は、ほっとするのと同時に、誰か勉強で分からないところがあって、悩んでいないか教室を回り始めました。すると、最初に目にとまった男の子が書いていた言葉に「ハッ」としました。その生徒は、「津波」とゆっくり書いていました。その時私は、何も考えられず思わず息を呑みました。生徒にとっては、それはただの理科用語ではありません。私はどうやってその内容に触れるべきか迷いました。ミーティングで震災のこ



教育学部学校教育教員養成課程言語・社会コース 4回生 兵庫県立小野高等学校 ひろ た たかや **唐田 貴也さん**

とをなるべく想起させないように気を付けることと決めていましたが、同じような経験をした学生どうしで毎日感じたことや、考えたことを共有したときに、それが簡単なことではないということを確認しました。ちょっとした思い込み、常識だと思っていることが、相手には常識ではないことがあります。教育の現場なら、どこにいてもこのようなことに気を付けなければならない、そんな当たり前のことが求められているのだと、自分で実践する中でもう一度、難しさを感じました。



特集

被災地の中学生であろうと、奈良県内の中学生であろうと、 学習支援というスタンスは変えてはならない

今回の活動に参加し、多くのことを学びました。その中でも今後に生かすべきだと感じたことが1つあります。それは、被災地の中学生であろうと、奈良県内の中学生であろうと、学習支援というスタンスは変えてはならないということです。

生徒の中で、意見文の宿題をしている子がおり、震災ボランティアで経験した国際交流について書きたいとのことだったのですが、正直にいうと、私はあまり内容に深く立ち入りたくないと考えてしまいました。 地震を直接体験していない私が根掘り葉掘り聞いてもいいものか、と考えてしまったからです。後日支援先の学校の先生にこの生徒のことを相談してみたのですが、先生からは「書きたいなら書かせるべき。その子も乗り越えようとしている」という言葉をいただきました。



教育学部学校教育教員養成課程言語・社会コース 4回生 福岡県立八女高等学校 まっま みさと 松尾 美里さん

事前ミーティングでは、震災には直接触れないようにしようと決めていましたが、その子が学習したいことを支援するにあたって「被災したから」という考えで遠慮してしまうのではなく、ある程度の配慮は必要ですが、学びたいと思っている生徒の手助けをすることが最も必要なことだと、この経験を通して気づくことができました。実際、地震や津波と向き合うことで、それを乗り越えようとする生徒の姿が多く見られました。

被災地だから、などといったくくりで見るのではなく、背景などを理解し、その子が今何を知りたいのかを明確にすることが、学習支援の在り方でしょう。

今後も支援の場があれば、この経験を思 い出して取り組みたいです。

普段どおり、生徒への思いやりを持って

実際に震災にあったことのない私にとって、現地で何を感じ取ることができるのか、生徒たちに何ができるのか、行くまでは全く分かりませんでした。

実際に学習補助に入ると、生徒たちは元気よく笑顔で迎えてくれて、たまにはたわいのない話をしながら、ともに学習をすることができました。どのようにしたらうまく伝わるのか、興味を持ってくれるのか、ということを日々のミーティングや経験から考えるうちに、子どもたちに違和感なく接することができるようになり、これが被災地であってもそうでなくても、普通の教育現場なのだと感じるようになりました。生徒たちの背景を考える機会が多くありましたが、町を見ることによって感じ取れることは多く、少しは生徒に



教育学部総合教育課程 環境教育コース 4回生 熊本県立八代高等学校 み うら ゆ き 三浦 友紀さん

寄り添うことができたのではないかと思います。目を覆いたくなるような景色がまだまだ残っていますが、それが生徒の日常であり、被災された方々の日常です。その日常にどれだけ私たちボランティアが自然に溶け込めるのか、というのが自分自身で多く考えた部分でもあります。

被災地だという思いは頭の片隅に置いて、普段通り、生徒への思いやりを持っていれば、これらの学習補助のボランティアはうまくいくのではないかと思います。

最後にこのような機会を与えてくださった宮城教育大学の方々、奈良教育大学の方々に深く感謝します。 ありがとう ございました。

チームの大切さ、ミーティングの重要性

私は主に理科領域の担当として活動したのですが、現地での初日の活動で驚いたことがあります。それは、子どもが通常通り「津波」や「地震」について学んでいたということです。これらは中学生で学習するとはいえ、被災地でも学んでいるとは思ってもいなかったので、正直、質問されたらどうしようと迷ったまま1日目の支援を終えました。その日の夜、派遣メンバーでミーティングを行い、そのことについて質問された時、単純にその現象を説明し、被災の状況などを例に出したり被災時を思い出させるような発言はしないという結論に至りました。私が全くどう対応していいか分からない時に、



教育学部総合教育課程 科学情報コース 3回生 兵庫県立相生高等学校 かとうりょう 加東 遼さん

いろいろな意見をもらって、チーム の大切さ、ミーティングの重要性を 感じました。

また、先生にはなかなか悩みを打ち明けられない生徒に対して、年齢が近い大学生の力はとても必要とされていると感じました。支援に来た人のモラルや目的意識が欠けていると、生徒に多大なマイナスの影響を及ぼす恐れがあります。しかし、一人ひとりが意識して行動すれば、生徒に対してプラスに働きかけることができるのではないかと感じました。

被災地での経験を今後の自身の活動に生かしていきたいと思います。



平成23年9月10日(土)から17日(土)(現地での活動:9月12日(月)~16日(金))に第二次隊の学生6名を派遣、仙台空港にほど近い宮城県岩沼市立玉浦小学校と玉浦中学校において、学習補助活動を行いました。今回の派遣では、授業が開始されていることもあり、第一次隊が自学自習支援中心であったのに対し、教室での授業補助が中心となりました。

また、今回の派遣学生が中心となり、支援に伺った小学校へ本を送る活動も進められています。





東日本大震災教育復興支援 ボランティアについて



教育実践開発研究センター 地域教育支援開発部門 特任准教授 **林 美海**



教育実践開発研究センターボランティアサポートオフィス 相談員 小島 道子

派遣に先立って

本学では震災直後から、学生がボランティアセンター(現:ボランティアサポートオフィス)に集まって募金活動を計画・実施したり、行政機関等の募集するボランティア活動に応募し、現地にかけつけたり、また、奈良県内に避難している子どもを対象とした支援活動を計画・実施する動きがありました。

教職員においても、震災直後から長友恒人学長等を発起人とした義援金を呼びかける動きや、教員が文部科学省、奈良県による派遣等で現地に赴く活動や、加藤久雄副学長と学生支援課等によりユネスコ・スクール支援大学間ネットワーク(ASPUnivNet)を通じて衣類や学用品を被災地に届ける動きもありました。

今回の派遣は、こういった学生や教職員やその他さまざまな 学内の動きが一つになることで実現したものと言えます。事前 研修としては、原子核工学がご専門で、チェルノブイリ原発事 故の調査にも携わっておられた学長や、現地で活動をされてき た市来百合子先生、根來秀樹先生によるものが行われました。

学生自身のミーティングを重視した活動

現地における実際の活動の方針に関しては、リーダーの木下さんの司会の下、学生だけのミーティングで決めてもらうことになりました。今回派遣された学生は例えば松尾さんが「被災地の中学生であろうと、学習支援というスタンスは変えてはならない」と書かれていたり、三浦さんが「普段どおり、生徒へ

の思いやりを持って」と書かれていたりするように、活動の方針をミーティングで明確化した上で支援に取り組まれています。中学校「理科」の教科内容としての「地震」をどう扱うかというところで、彼らの出したこの結論の意義が最も明瞭な形で現れていると思います。

多くの教育学者が身近で具体的な経験から抽象的な理解を深化させていく学習理論の構築をしてきた中で、一見したところ彼らの選んだ道はそれらの理論とは異なるものかのように見えるかも知れません。しかし、身近で具体的なものを取り上げることで、逆に学習の深化を阻害するものもあることに彼らはミーティングを通じて気づき、学習理論の表面的な理解を超えることができたのかも知れません。

未来に向けて

また、このようにミーティングで決められた活動の方針は「被災地の可愛そうな子ども」として一括りにした支援ではなく、 一人ひとりの子どもの状況に応じた支援を行うことにつながったかと思います。

実際のところ、学生が将来活躍するであろう未来の学校現場においても、地震とは異なった事情で家族を失った子どもをはじめ、 一人ひとりさまざまな背景のある子どもがいることでしょう。

今回、歴史に残る大地震を共通に経験した子どもたちの前であっても、一人ひとりの状況を重視した支援と、それにつながる方針を自分たちで決めるためのミーティングの経験が、未来の学校現場における実践において役立つことを願っています。





職能成長能力を 備えた教員を養成するための 先進的な取組

~奈良教育大学における職能成長プロジェクトの推進~

職能成長プロジェクトとは

大学の授業において教育実践に関する知識やスキルを学習するだけでは教育現場でそれらを活用できる教員にはなれません。今、社会からは自らの実践を振り返り、課題や改善点を見つけ、解決しながら、教員としての力を自分で成長させようとする教員、すなわち、「職能成長能力」を備えた教員が求められています(図1)。



図 1 職能成長能力養成モデル

奈良教育大学では、平成 21 年度から平成 23 年度の 3 年間、 文部科学省の特別教育研究経費をうけ、「学生の職能成長過程 と一体化した統合的教職実践演習のモデル開発一職能成長養 成モデルとアセスメントに基づく学士力の保証一」(略称:職 能成長プロジェクト)に取り組んでいます。このプロジェクト では、「実践デザイン」「実践」「アセスメント」「目標設定」「改善・ 学習」の各ステージのサイクルを循環させる「職能成長能力



教職大学院 なかい たかし 准教授 中井 隆司



職能成長プロジェクト担当 よねざわ たかし 准教授 光沢 崇

養成モデル」に基づいて職能成長能力を備えた教員の養成を目指し、新しい授業モデルや自己学習用デジタル教材の開発、教育実習省察、教育実習サポートなど、様々な取組を実施しています。また、本プロジェクトでは、学生の4年間の大学生活における自己成長の確認と学びをガイドする「職能成長アセスメント支援システム」(略称: PASS)を開発・運用しています(図2)。



図2 PASSのトップページ

^{※1} 職能成長(能力)は、本学が卒業までに獲得すべき新任教員に求められる力として定めているカリキュラム・フレームワーク (7つの目標資質能力基準)の一つです。

今回は、様々な取組の中でも自己学習用のデジタル教材の開発と教育実習省察の取組について紹介したいと思います。

授業外で学習することができる デジタル教材の開発

「水泳指導時における学童期の入水時間」や「小学校理科A区分で新しく導入された内容」など教員になる上で知っておかなければならない基礎的・基本的な知識はたくさんあります。

この取組では、教員を目指す学生の自学自習をサポートする デジタル教材の開発にも取り組んでいます(図3)。



図3 デジタル教材の学習

平成21年度より保健体育講座や国語教育講座、社会科教育講座など多くの講座から協力教員を募り、全学的な取組としてデジタル教材を開発してきました。協力教員の先生方は、学生が教員を目指す上で必要な力を身につけるためのデジタル教材とは何かということから考え、悪戦苦闘しながらも開発に取り組んでくれました。その結果、昨年度までに以下の3つのタイプのデジタル教材を合計で約50コンテンツ以上作成しました。

【デジタル教材のタイプ】

- ① Q&A やリンク集等、教員を目指す上で必要な情報を提供 していくための教材
- ②ドリル学習型の問題など、教員を目指す上で必要な知識 を獲得していくための教材
- ③ シチュエーションビデオ (授業映像)等を準備し、複合 的な状況下での教員としての適切な判断や行動について、 考えるきっかけを提供していくための教材

実際にデジタル教材を学習した学生は「『水泳指導時に必要な水温と入水時間、水位に関する基本問題』を学習しましたが、子どもの命を守る上で大切な事について初めて学ぶことが多くあったので非常に役に立ちました。」などの感想を残しています。

これらデジタル教材は、本学の学部生であれば、いつでも、 どこでも学びたい時にインターネットを使って PASS の中で 学習することができるので是非チャレンジしてください。ちな みに、PASS では次のようなこともできます。

- ① 教員を目指す今の自分の力を自己診断 (図 4)
- ② 自己診断の結果をもとに、教員を目指す上で必要な力を身につけるために必要な授業科目の紹介
- ③ 自己診断の結果をもとに、教員を目指す上で必要な力を 身につけるために必要なデジタル教材の紹介と提供
- ④ 教員を目指す上で必要な力を身につけるために教育実習で行った実習授業の映像による振り返りと改善点の考察
- ⑤ 4年間の大学生活で学んだ成果(映像データや資料・ レポートのデータ)の蓄積による、成長過程の確認



図4 教員に必要な力の自己診断



教育実習で実践した 実習授業の振り返り (教育実習省察)の実施

この取組では、教育実習中だけでなく教育実習終了後も学び を継続するためにシステムを用意しています。

具体的には、教育実習中にデジタルビデオカメラを用いて学生が行う実習授業を計2回撮影します。さらに、インターネットに接続し、実習授業の映像データを実習校からPASSに送ります。教育実習終了後に学生はPASSの実習授業の振り返り機能を使って、実習授業の映像(2回分)を視聴し、コメントを入力します(図5)。これらの取組を通じて、学生は自らの実践を振り返り、良かった点や改善点を見出し、その原因や改善策を考え、自分に足りないところを見つけていきます。



図5 実習授業の振り返り

学生は、教育実習中に様々な経験を通じて教員を目指す上で必要な知識やスキルを学ぶことができます。それだけではなく、教育実習終了後に自らの教育実習経験を振り返ることで、「自

分の映像を見る(授業を客観的に見る)機会はそうないので、 非常にためになった。」「映像で見ることで、教育実習中には 気付けなかった部分にも気付くことができた。」など、学生は 教員を目指す上で必要な力をより一層成長させていきます。こ のような振り返りの方法を学ぶことは将来教員になった時に必 ず役立つと思います。なお、この取組は大学教員だけでなく、 附属学校園、奈良市内の協力校数校の先生方にも協力をいただ きながら実施しています。

今後の展望

最終年度を迎える本プロジェクトでは、各取組の内容をより 一層深化・発展させ、教員を目指す学生の職能成長能力を育成 していきます。

例えば、開発したデジタル教材の領域に偏りがあるので、今後は多様な領域のデジタル教材を数多く開発していきたいと考えています。教育実習にかかわる取組では、教育実習を経験した4回生が教育実習サポーターとして教育実習を行っている3回生の困りごとをサポートする教育実習サポートの取組へと発展させています。

さらに、今年度より全ての学部生が PASS を利用できるようになりました (図 6)。 奈良教育大学における 4 年間の学生の学びをサポートするとともに、彼らの学びの履歴を蓄積していきます。 平成 22 年度以降入学の教員免許状を取得しようとする学生を対象に、教員として必要な知識や技能の修得を最終確認することを目的とした「教職実践演習」の履修が義務づけられています。 そこで、本プロジェクトで得られた成果を、教職課程の学びの総まとめをしていく「教職実践演習」に還元していきたいと考えています。



図 6 PASS を利用する学生たち

お問い合わせ

奈良教育大学 新館 3 号棟 4 階 職能成長サポート室

TEL&FAX: 0742-27-9340 E-mail: pdpj@nara-edu.ac.jp ホームページ: http://pd.nara-edu.ac.jp/ PASSのURL: https://prod.nara-edu.ac.jp/



文化財の絵画記録保存の

奈良を代表する寺院の一つ「唐招提寺」 には、皆さんも一度は行かれたことで しょう。

奈良時代、幾度の苦難を越えて来日 した唐の高僧・鑑真和上が開山したこの 寺院で、今なお天平の息吹を伝える金堂 (国宝) が平成12年(2000) から10 年間にわたって全面解体修理(平成の大 修理) されました。

この金堂内部をはじめ、経年によって 古色蒼然とした古代の寺院建築や仏像が、 かつて鮮やかな暈繝**彩色であったことを、 師からの教えである現場主義を貫き、そ の探求心と想像を超える粘り強さを持っ て解明してきた本学美術教育講座の大山 明彦准教授にお話を伺いました。

この機会に出会えたことは、私にとって幸運でした。

実は300年に1回のチャンスだったのです。ところが今回は平成7年(1995)の阪神淡路大震災を機に文化財建造物の耐震調査が行われたことがきっかけで、唐招提寺金堂は、前回(明治期)の修復から100年目にして解体工事をすることになったのです。本当なら、古代建築物の修理は、300年に1回のサイクルが普通で、長ければ500年ということもあります。しかも、創建後、約1200年来の全面解体で、私たちは、まさに千載一遇のチャンスに巡り会ったわけです。

皆さんは、古代 (日本史では平安期ま

でを指す)のもので地上にある木造建築物、特に奈良時代のものは、ここ"奈良"にしかないことをご存じでしょうか。 平安時代のものですら全国に数えるほどしかなく、京都でも、平等院、醍醐寺のほか4~5例しかありません。そのほとんどは、争いによる火災、自然災害による崩壊等で失われています。

ところが、奈良には奈良時代の木造建築物が奇跡的に十数棟程も残っていて、 そのうち彩色が確認できるものとして、 他には、薬師寺東塔、栄山寺八角堂(五條市)などがあります。



※量額(濃から淡へ、淡から濃へと層をなすように繰り返す彩色法→グラデーション的表現) 8世紀頃をピークに、中国西域から伝わり主に全相華(蓮、石榴、牡丹などを組み合わせた空想上の花文)などの文様を表す。奈良・平安時代の仏画、寺院の荘厳や染織などに用いられた。



ため、その復元と模写に挑み続ける。

創建来の色彩が、 日の前に・・・・1



金堂扉の金具の下から文様が現れた

金堂の扉から赤い地色がでてきたの は、予想外でした。金堂の正面には10 枚の木製の扉があって、これに施された 金具を外すと、その下から鮮やかな色彩 がでてきました。調査によると、元禄時 代(300年前)にこの金具は取り替えら れたものです。言い換えれば、それ以降、

この時まで誰も見ていなかったわけです から、復元する、つまり千年の歴史をた どるというのは、そんなに生やさしいこ とではないということはお分かりいただ けるかと思います。

風食痕を丹念に写し取る、 今思えば気の遠くなる作業でした。

金堂の扉の1枚は高さ5m、幅1~1.4m 程もあります。実際、立てられた状態で は、作業ができませんので、これを床に 置き、その上に作業するための板を渡し て、いわゆるトレースをしていくのです。 風食痕、つまり、木材に顔料で描かれ ているので、色を置くと早くに落ちるも のと長い間頑張ってくれるものがあって、 その時間差によって風食の痕跡が生じま す。その凹凸の度合いによって描線や色 の違いがわかるのです。

一般の方には、例えば、コンピュータ で画像解析したり、X線や赤外線など で分析するものと思われているかもしれ ません。要所によってはそれも効果的な 方法だと思いますが、それだけでは無 理で、どうしても人による手作業が必要 なのです。これは、どの分野でも恐らく そうです。

最初は全然わからない、単にわずか な起伏でしかないのです。眼でつぶさ に見ては、紙をあてて写しとっていきま す。伝統的な模写技法の一つ、「上げ写 し」法と言って、通常は原画の上に薄い 和紙を重ね、その紙を巻き上げ、巻き 下ろしを繰り返しながら、眼に映る残像 をたよりに、上に重ねた薄い和紙に原 画を正確に描き写してゆく方法です。こ れに、眼で見て割り出した顔料の名前 を書き込んでいきます。地道で気の遠 くなる作業です。当時、私の研究室の 学生たちも根気強く協力してくれたおか げで、作業を始めておよそ1年、延べ約 3.000時間、ようやく全ての扉の文様の 復元に辿りついたわけです。



美術教育講座

准教授 大山 明彦



専門は、絵画記録保存。

東京芸術大学大学院で保存修復技術を学び、修了後の1984年、国の選定保 存技術保持者だった山崎昭二郎氏に師事。国宝石山寺多宝塔などの現場に帯 同して、9年間修行。前任地の宮内庁正倉院事務所では整理室員として、正倉 院宝物の保存管理、研究を行う。

今年5月、文化遺産を優れた技を駆使して最前線で守り伝え、卓越した業績を 挙げたとして読売新聞社から「第5回読売あをによし賞」 奨励賞を受賞した。



彩られた金色の鎧をまとっていたことが同氏により紹介されている。

クローズアップ

復元を通して、天平の工人らの仕事ぶり(技術)には改めて感嘆させられました。同じ意匠でも個々が独自の画風でおおらかに表現されていて、シンプルで力強い、ゆったりとした時間の流れを感じます。





復元された金堂扉の量繝文様

記録媒体で 一番優れたものは…

いわゆる、"修復"と呼ばれるものとは違って、現物自体に手を加えて直すということではありません。

具体的には、先に説明したように現物を見ては和紙などの媒体に記録していきますが、これと同時に、復元の根拠も明らかにして文章化して残していきます。和紙に墨で描くのは、記録媒体として、実はこれが一番信頼できるからです。正倉院文書が証明しているように、千年の時を越えて今も残っていますね。これだけの実績を持ったものはほかにはありません。今ここにある印刷物なら100年、せいぜい200年持つかどうか・・。

また、たとえ将来どんな精度の高い 写真やデジタル記号などのメディアで 残せたとしても、千年後、それを見た 人が、果たして正しくそのものを理解 できるでしょうか。写真といっても、 ごく一部の情報の切り取りでしかない わけで、本物には絶対になりえないの です。

それを理解していくためには、"人間がメディア"にならなければならないと思っています。つまり、実際に本物に触れて感激しそれを経験した人が、次の世代に伝え、それがまた次の世代に・・。そうしていかないと、もの(画像や報告書)だけ残してもだめだと思います。私は、研究室の学生に、いつもそこのところを話します。学生たちもよく理解してくれて、みんな私のメディアになってくれています(笑)。

「それをやる人間、やってみて感得した人間を何人残せるか」これが私にとって一番大事な仕事です。

定職につかず、ヨーロッパを スケッチして巡った時代も。

私がこの分野の研究をすることになったきっかけは、恩師でこの分野の第一人者でもある山崎昭二郎先生との出会いです。大学院を修了してからの約10年間、私は定職もなく、山崎先生の手伝いやアルバイトをして暮らしていました。

その頃、先生から「唐招提寺の金堂はいつか解体されるから、その時に対応できるよう今から奈良時代のことを勉強しておくように」と言われました。近世、中世について現場で先生から教わっていた時ですら、これはなかなか手強いと思っていたので、その頃は、奈良時代のものはそうそう手に負えるものではないと思っていました。

32歳の時、半年間、ヨーロッパをぶらぶらスケッチして歩いて回りました。イタリアやギリシャの寺院や彫刻、それにフレスコ画なんかを、もう今にも崩れ落ちそうなところで緊張感を持って描いた覚えがあります。

もともと絵が好きで、えんぴつ1本を持って描いているだけで楽しくて、 絵を売るでもなく、お金にならないことをやっていました(笑)。





イタリア・ギリシャでのスケッチ

このスケッチ旅行を通して、ヨーロッパでは教会でもどこでも無料でこういうものが誰でも自由にデッサンできることに感激したのを覚えています。どの国も自国の美術や芸術を大事にしていて、それが広くみんなのものとして地に足を付けるように発展して来たからでしょう。

この分野を少しでも広く 知ってもらいたい。

私はこの大学に来て、12年になりますが、当初、"なんでも鑑定団"みたいなのを文化財と思われて、ある先生から「骨董品を見てくれないか」と声を掛けられたこともありました(笑)。

この分野を少しでも広く一般の方にも知ってもらうことが必要だと思っています。この分野を専門にして職業にするというのは現実としては難しく、二十年、三十年かかる仕事、その間も生活しなければならないわけですから、まずこれでくじけてしまいます。

それでも先日、現在、文化庁文化財部の事務補佐員として頑張っている2期生の教え子が、「キトラ古墳壁画の四神を描いたんです」と訪ねてくれました。目や手、身体を動かしてやったことはちゃんと身に付いているようで、「おかげで、こういうのを見ても分かるようになりました」と。何人かはこうして育ってくれていると思うと、うれしい気持ちになります。

今年、「読売あをによし賞奨励賞」をいただいたことは、今後の研究を進める上で、大きな励みとなっています。これからも努力を重ね、後進の育成に取り組んで行きたいと思います。



宗教の ひみつ

~学内に残る戦争歴史遺跡をたどる~

学生広報スタッフ "なっきょん's CLUB" 企画



奈良教育大学のある高畑町周辺が、日露戦争後から日中戦争、太平洋戦争にかけて、旧日本陸軍の駐屯地であったことは、大学で学ぶ学生たちにすらあまり知られていません。

大学の北隣、奈良第2地方合同庁舎前には、奈良連隊跡記念碑があり、その碑文には、この地で将兵、延べ7万人が駐屯したとされており、多くの若者が厳しい訓練を経て戦地に向かったことが刻まれています。 今回は、附属小学校社会科部の櫻本豊己主幹教諭、中窪寿弥教諭に大学の片隅でひっそりと今もその史実を証明してくれる戦争遺跡、遺物を紹介していただきました。





記念碑の上部には 陸軍旗と 銃剣三丁が デザインされている。



○奈良連隊の歴史

1909 (明治42)年 歩兵53連隊新設 1925 (大正14)年 京都歩兵38連隊移駐 1941 (昭和16)年 歩兵153連隊編成 1944 (昭和19)年 岐阜陸軍航空整備学校奈良教育隊開設

同年10月 アメリカ第6軍接収

1958 (昭和33)年 奈良学芸大学(現・奈良教育大学)が登大路より移設



次はここ、レンガが階段 水に高さ約2メートル積 まれてるね。これは高射 まれてるね。これは高射 でるんだけど、よくわか らないらしい。



ーークだね。

今はもう門柱しか残ってない けど、当時、通用門として、食料 や日用雑貨なんかがここから入 れられたんだよ。この正反対方 向(南側)にもかつて門があっ たんだ。

教育資料館は、みんなも利用し たことがあるね。当時は、糧秣 庫と言って食料の貯蔵庫と

して建てられたんだ。 **窓の形状もアーチ型** 大学でも ひときわ目立っているね。



今は、教育資料の展示や 保管、作品の展示など、 いろんなイベントにも使 われていますね。

> これは陸軍用地 であったことを示 す境界石だよ。



①糧秣庫 (現教育資料館)



物なんだ。戦後、アメリ オバコ、と言ってヨー をしているね。、ヘラオ 力軍が駐留していた頃、 けど、日本に帰化した植 ロッパ原産の植物だ この草の葉はヘラの形 一緒に種子がやって来た

⑤ヘラオオバコ

「奈良教育大学の植物図鑑HP」※写真出展

の弾薬庫として使われていここは当時、射撃訓練用

ごらん。星(☆)の模様があ たんだ。屋根の鬼瓦を見て

オオバコより 普段見かける

茎が長いですね。

ていたんだ。今もその様子 る目的で高い土壁が積まれ 建物のまわりは暴発を避け 表しているんだ。 るね。これは、陸軍の星章を



⑥弾薬庫跡

並木が広がっているね。 附属小学校の東側には桜

学生食堂 南側付近

かなり傷んでるなぁ…

高畑キャンパス航空写真

6 弾薬庫跡

⑦正門

先生どうもありがとう

こざいました。

考える機会になりました

以めて、平和、を

かったのでしょう。同じ がどんな思いで戦地に向 があるのは意義深い地に今こうして大学 の正門から多くの若多

附属小学校では、子ど ワークの一つとして、 に地域教育フィールド もたちや保護者を対象 見学会を開催していこうした戦争遺跡の



ようだから調べてみて もまだ遺跡が残ってる るんだ。大学の周辺に 当時を伝えてくれてい こうして今も物言わず 残ってるね。 も正門付近の面影が 征時の写真だよ。今 構内にある戦争遺跡が これは、昭和9年の出

はどうかな?



GOAL

⑦正門



現在の正門付近



AUTUMN 2011 ならやま_14



「一歩」踏み出さなければ 見えない世界がある。



現地の子どもたちと一緒に

中学校勤務後、平成22年1月から青年海外協力 隊・村落開発普及員として、西アフリカのベナン共 和国で、女性・子ども・障害者といった社会的弱者 の支援活動に日々奮闘しています。西アフリカの厳 しい気候と、インフラがまだまだ整わず日々起こる 停電に断水、日本とは全く違う文化にフランス語と 現地語での生活、当初は活動を始めるよりもまず 自分が毎日生きていくことが精一杯でした。日本社 会からは想像できないほど、ゆったりとしか進まな い時間に加え仕事に効率性を求めない人々ののんび りした性格。活動をするという意味では、全く思う ように物事が進まず、時間も約束も守らず、変わっ ていかない状況に、イライラすることも少なくあり ません。途上国のイメージである貧困や、病気、物 乞いという場面を目にすることも確かに多いけれ ど、厳しい生活環境の中でたくましく生きるには、 ある程度の気楽さやのんびりした気長な性格も必 要なのかな、と次第に感じられるようになりました。 現地の人々と同じ目線で生活していくと、こういっ た色眼鏡で見ていた物の考え方とは違う、現地での 発見をたくさんします。現地の人々が大切にしてい ること、それは時間や仕事よりも、人と人とのつな がり。ベナンではあいさつや会話をとても大事にし、 他人の子でもみんなが育てるような大家族社会。 子どもが悪さをすれば、近くにいる大人が叱り、おっ ぱいが出ない母親がいれば他人の赤ちゃんでもおっ ぱいをやる。外国人の私を家族のように受け入れて くれ、決して裕福ではないはずなのにごはんを作っ



てくれたり、おごってくれたり、店に行けばおまけをしてくれたり。いくら待たされても、すぐに必要なことが終えられなくても怒らない。そういった寛容さ、優しさ、おだやかさにはむしろ学ぶべきことがたくさんあります。人々の心の豊かさという意味では、今の日本人よりよほど幸せレベルが高いのではないかと思います。彼らとの日々の生活の中で学ぶ、「人と人が支え合って生きていく」姿勢。'国際協力'あるいは本来の'人間社会'に必要なことを今再確認している気がします。長期活動を通して住民と共有し築いていける貴重な時間、つながり、経験に、協力隊としてベナンにいられる喜びを感じています。

海外へ向かって私の活動視点を大きく広げるきっかけになったのは、大学時代を通しての、人々との出会いや経験があったからです。大学の交換留学制度を通して単身アメリカで暮らした10カ月間。その貴重な機会を通して得たことは、「国境を越えて人と笑い、悩み、語り、受け入れ合う楽しさ」でした。そしてこの経験が、「アフリカへ行きたい」という新たな目標を生み、私を海外の大学院へと突き動かしました。大学院研究で、夢に見たアフリカに初めて降り立ち、そこで多く活躍する国籍の違った人々、ア



フリカやアフリカ人そのものの魅力、そういっ たたくさんの要素が、私の中の開発援助分野へ の興味を沸き立たせました。また、その3カ月間の アフリカ滞在体験が、その後、私が中学校教師と して子ども達に伝えられる最大の財産になりました。 生徒達の素直な、アフリカとの文化の違いや外 の世界への興味を、国際社会の中の一員として 伝える重要性も改めて実感しました。こういった 留学や、これまでの体験を生み出す原動力となっ たのは、大学及び大学の先生方の温かく心強い バックアップがあったからです。そして現 在、これまでの経験を生かし、現地の子ども 達への環境・栄養教育、また障害者への収入 向上の一環となる生産活動支援など、ゆっくり ですが人々に受け入れられ得る活動を模索し、 進めています。

職場の同僚と

新しい一歩を踏み出すというのは、誰しもが簡単だと感じることではないかもしれません。勇気や、それなりの覚悟、それに伴う悩みや苦しみもあると思います。私も例外ではありません。初めて交換留学で単身海外での生活を始めたときは、言葉も思うように話せず、友達や知り合いもおらず、当初はストレス、つらさと寂しさで帰りたいと思ったこともありました。でも、だからこそ生まれ

る新たな出会いや、経験、その醍醐味は「一歩」踏み出さなければ見えない世界だと思います。少しの勇気を出してつらさを乗り越えると、それまで見えなかった自分の弱さや、強さの再発見につながり、自分を大きく成長させる貴重な体験になるはずです。私が、アフリカをこうして間近で見て、テレビで見る病気と貧困だけではない、笑顔と優しさに溢れたアフリカを感じ、心の豊かさを学び、日本で忘れかけていた大切なことをもう一度肌で感じられるのは、ベナンへと踏み出す一歩があったからです。大学時代の、学生にさまざまな経験を与えるイベントや機会、支援して下さる先生方、それに何にでも取り組める自由な時間を最大限に利用して、一人ひとり何か目標を持って、積極的な大学生活を送ってほしいと思います。

ここまで来る道のりは、いつも楽しいことばかりではありませんでしたが、振り返れば、学生時代からこれまで、夢や目標を持ち続け、諦めずに努力することを常に学んでいたと思います。そして、そこへ導いてくれたのは、温かく助言し、応援して下さる谷口先生(技術教育講座 谷口義昭教授)をはじめ大学でお世話になった方々、これまで見守って下さった全ての人々の支えがあったからです。まさに「一期一会」の人との出会い、ここにいられる残りの貴重な1日1日を、目の前のベナン人一人ひとりと精一杯共有し、協力隊としての任務を遂行しようと思っています。





高田研究室の紹介

保健体育専修の学生が6つの研究室から所属する研究室を決定するのは、3回生の終わり頃です。体育教育について具体的に何を学んでいくのか、どんなテーマで卒業論文を書きたいのかも具体的に決めていませんでしたが、体育科教育に興味を持ったため、高田研究室に所属しました。高田俊也先生は、運動につまずいている子が、教師の働きかけによってできるようになっていく過程をビデオで見せてくださり、また主人公がスポーツを通して成長していく過程を漫画を使って示すなど、私たち学生が興味を持って体育教育学を学習していくことのできる環境で、とても分かりやすくご指導してくださいます。研究室の雰囲気はとても明るく、学生同士でお互いの卒業論文について話し合ったり、アドバイスし合ったりしています。高田先生に対しても、気軽に質問できる環境のため、楽しく学んでいくことができます。

自分の成長が実感できる研究

高田研究室では、卒業論文や勉強会に向けて、ある分野を勉強するのではなく、まずは「自己分析」を原点としているところが他の研究室とは異なるところだと思います。今の自分は何ができ、何が足りないのか。何を知り、何を知らないのか自己分析を行います。改めて時間をかけて自分と向き合うことによって、自分自身気づいていないようなことに気づくことができます。そして、そこで気づいた、今の自分に足りないところや、これからの自分に必要なこと・疑問に思っていることなどを卒業論文や勉強会で取り上げて学んでいきます。学んだことすべてが直接今後の自分のためになるため、自分が成長していることが実感できる研究室です。

また高田先生は、私たち学生の気付きや発見を大切にしてくださいます。卒業論文に取り組む際も、すぐに知識を教えてくださるのではなく、なぜそこに疑問を持ったのか、その疑問点こそが本当に考えるところではないか、という指導をしてくださることが多くあります。この助言から、私たち学生は、何度も自分に問い続けます。すべてに前進できるような発見や考えがでる訳ではありませんが、この問い続けた時間は決して無駄になることなく、私たち自身の力になっていると思います。

高田研究室だからできる貴重な経験

教師として教育現場に出る前に、実際にさまざまな教育現場を見ることは、簡単なことではありません。しかし高田研究室では、高田先生がかかわっておられる小学校の体育の授業を見学し、また教育現場の教師の方々と直接お話させていただくという、とても貴重な経験ができます。やはり、どれだけたくさんの本を読み、ニュースや新聞で最近の学校や子どもや教育について学んでいても、「百聞は一見にしかず」という言葉があるように、実際に見学をし、教育現場の教師の方々の話を聞くことで、とても多くのことを学ぶことができます。理屈だけでなく、子どもあっての授業というものを身近に感じることができます。この貴重な経験を卒業論文、そして教師になってからも生かしていこうと思っています。

高田研究室での主な卒業論文テーマ(一例)

●仲間関係を築く方策の検討

一授業場面での教師の関わり方を中心に一

仲間関係を強めるという凝集性の研究と仲間関係を崩さないという学級崩壊の研究からヒントを得、関係構築の方策を実践に適用し、検証したもの。

■潤二郎が教師になるために獲得すべき力量の検討 ー特に子ども把握について—

学生が教師になるために必要な力量を身に付けるために、教育実習での課題を振り返り、再度、実践に臨み、子ども把握という視点を中心に獲得すべき力量を検討したもの。

●学習成果を導くために必要な 教師の教授意図にもとづく関わり方の検討 ー特に自己開示と受容を促すための関わりについて―

子ども相互の関係を大切にした授業実践の実現のために、子ども相互に自己開示と受容の関係を繰り返す過程を生み出す教師の関わりを明らかにすることを目的としたもの。

Student's Voice

私は対人関係についての卒業論文を書いています。この内容を卒業論文のテーマにした理由は、自己分析をしていく中で、自分自身が周りとの関係を作ることが苦手であるということに気づき、それを克服したいと考えたからです。そこで、対人関係を上手に形成できる人とできない人との違いや、その要因を明らかにする研究をしています。高田先生の指導のもと、最後まで全力で取り組みたいです。



教育学部学校教育教員養成課程 身体·表現コース 4回生

たしまか ゆ い **西岡 佑惟 さん** 私立桃山学院高等学校出身



留学生

奈良教育大学の国際交流協定校の一つであるリヨン第三大学(2004年3月 交流協定締結)は、フランス第二の都市リヨンにあります。リヨンは歴史ある古 い町で、教会などたくさんの古い建物や有名なオペラを手軽な料金で観ること ができる劇場があり、芸術好きな人にはぴった

りの町です。今回はそんなリヨン第三大学に留 学していた高萩典子さんに話を聞きました。





友達の家で行ったパーティーで



①ロック・ヘイブン大学

④公州大学校

⑤光州教育大学校

- ②セントラルミシガン大学 ③嶺南大学校
- ⑦華東師範大学
 - ⑧インドネシア教育大学
 - ⑨ハイデルベルク大学
- ⑩ブカレスト大学 ①リヨン第三大学



← 留学をしようと思ったきっかけは。

フランスの美術や世界遺産への興味がきっかけでフランス 語の勉強を始めました。そこで、勉強するからには実践的で 生きたフランス語を身につけたいと思い、留学を決意しました。

← 留学する前にどれくらい語学の勉強を していましたか。

3回生の後期から集中して勉強し、仏語Ⅱの授業の後は、 先生に補習をしてもらいました。また、フランス語検定の勉強 だけでなく、NHK のテレビ・ラジオ放送の教材を使って学習 に取り組みました。

← 留学先ではどのような1日を 過ごしていましたか。

勉強、友達と買い物やお茶をすることが日常でしたが、私は 美術専攻なので、現地でも頻繁に絵を描きました。透明水彩 を使ったイラストが中心です。

← 留学生活で一番驚いたことは何ですか。

ストライキで公共の交通機関が止まったり、郵便局員が荷 物を届けるのに不在届を入れてくれないので不便だと感じまし た。また、フランスは有名なブランド品やベルサイユのばらな ど華やかなイメージがありますが、移民が多く、貧富の差が 激しいです。物乞いをしているおばあさんや子どもに会うのは 日常茶飯事です。失業率も日本より高いです。

← 留学中一番うれしかったこと、 逆に大変だったことは何ですか。

うれしかったことは、現地で友達ができたおかげで生きた フランス語に触れることができたことです。大変だったことは、 着いたばかりの頃に、住居の契約、銀行口座の開設など一人 でしなければならなかったことです。これまで一人暮らしをし たことがなかったので、これも社会勉強になったのではない かと思います。

♣ 留学体験をどのように いかしていきたいと思いますか。

フランス語学校のスタッフになり、留学希望の生徒さんの アドバイス、サポートを親身に行い、「高萩さんに相談してよ かった」と言われるような人材を目指したいです。

📤 在学生、高校生の皆さんに一言。

友達や勉強、つらかったことなどたくさんの思い出がありま すが、自分だけの財産を作ってください!

リヨンで有名なフルヴィエール寺院。 フランス留学では、美しいものをたく さん見ることができました



キタリ
会教生

左下から時計回りに洪さん、春日さん、山口さん、折戸さん

Profile*

プロフィール

教育学部学校教育教員養成言語・社会コース 3回生

折戸 大輔 さん 富山県立富山南高等学校出身

教育学部学校教育教員養成課程理数・生活科学コース 2回生

春日光さん 長野県立伊那北高等学校出身

洪雪雅さん 私立建国高等学校出身

教育学部学校教育教員養成課程 教育·発達基礎コース 2回生

山山 美南海 さん 岡山県立岡山操山高等学校出身



キャップからシールをはがす作業をするメンバー

世界の子どもにワクチンを一ペットボトルキャップから始まるボランティアー

本学では、ペットボトル用ゴミ箱の近くや事務室に「世界の子どもにワクチンを」と書かれた小さなカゴが置かれています。これは、ペットボトルキャップを回収するために、ボランティア・サポート・オフィスで活動する「あいふた From 奈教」プロジェクトの学生メンバーが設置しているものです。今回は、ペットボトルのキャップを集めてポリオワクチンを購入し、発展途上国の子どもたちに送る活動に取り組んでいる「あいふた From 奈教」プロジェクトのメンバー4人に話を聞きました。

きっかけは身近なところに

「普段よく使われているペットボトル。ペットボトル本体は一般的にリサイクルされているけれど、キャップはあまりリサイクルされていない。キャップがそのまま大量に燃やされるのは環境に良くない」「発展途上国の子どもたちに何かできないか」この2つの考えが一致する活動として「あいふたFrom 奈教」プロジェクトが始まりました。

最初の活動は、平成20年10月31日からの大学祭でのキャップ回収、3日間で80個程集まりました。その後、継続的に学内に回収ボックスを設置して本格的にキャップを回収し始めると共に、大学周辺の小学校・幼稚園・病院・NPO団体などにも協力を依頼、より多くのキャップを集めることができるよう努力を続けました。次第に大きな袋にたくさんのキャップを持って来てくれる団体も出てくるようになり、活動を始めて2年と少し、平成23年2月11日にはポリオワクチン1000人分相当(キャップ80万個)のキャップ回収を達成。NPO法人エコキャップ推進協会よりエコキャップ活動学生団体として認定されました。その後も順調に回収を続け、10月11日現在でワクチン約1297人分、約104万個のキャップが回収されています。

新たな一歩

最近では、キャップを集めてワクチンを送る活動だけでなく、活動を広めるために、更に一歩進んだ活動も行っています。その一つが、キャップを再利用した商品の開発です。「多くの人がこの活動に意欲を燃やしていただけるように、また子どもたちの意識を高めることができるように、集めたキャップで身近なリサイクル商品を作りたい」とのプロジェクトメンバーの声にメーカーが賛同し、水性ボールペンとマーカーペンの共同開発が実現しました。開発されたペンは早速7月30日に実施されたオープンキャンパスで配布された (P21参照) ほか、協力団体等の記念品として各団体から好評を得ており、より一層活動の輪が広がると期待されています。

今年2月には、キャップ回収協力で関わりのある近隣小学校で、キャップ回収からワクチンを送るまで、そしてキャップがリサイクルされるまでを紹介する出前授業を実施。また、活動やキャップがリサイクルされるまでの様子をまとめた資料を作成、2学期からの総合学習や社会科の授業で使用してもらえればと大学周辺の小学校に配布しており、依頼があれば出前授業も行う予定にしています。

活動はまだまだ途中

これからの目標として「子どもたちにペットボトルや空き缶などの大量生産、大量消費は良くないということを知ってもらいたい。キャップの回収・リサイクルは、ペットボトルの大量生産・大量消費が前提にあり、今後は大量生産、大量消費をやめようということになればよいと考えています。」とプロジェクト代表の折戸さんは話します。そのためにも、子どもたちへプロジェクト参加をより積極的に呼びかけると同時に、将来教師として子どもたちを教える立場となる学生たちへの呼びかけも重要です。

発展途上国の子どもたちを救うために、また無駄のない社会を目指して、プロジェクトメンバーの活動は続きます。



│番外編 /

奈良教育大学では、課外活動団体として、 文化会・体育会に所属する団体以外にも、 学生団体が活動しています。今回は学生団 体の一つ、大学祭実行委員会を紹介します。

- (障がい者問題研究会) すぎのこ

体育会

- - - ●男女ソフトテニス部 ●男子ソフトボール部

●女子バレーボール部

●男子ハンドボール部



委員数67名(男子35名·女子32名)

毎年11月ごろに行われる大学祭、輝甍祭(きぼうさい)に向けて活動を行っています。1年を通し、大学 祭に向けイベントや模擬店などの団体と会議を行い、夏休みの長期休暇を利用して装飾用物品などの製 作に取り組んでいます。輝甍祭を成功させるという大きな目標のもと、委員会一同盛んに活動しています。

一つの目標に向かって



教育学部学校教育教員養成課程 言語・社会コース 3回生 奈良県立高田高等学校出身 第62代大学祭実行委員会 委員長 ひらやま ゆう き **平山 裕基** さん

こんにちは、奈良教育大学第62代大 学祭実行委員会です。大学祭実行委員会 は、仕事の内容によってそれぞれ部局に 分かれています。パンフレットや当日の 装飾を扱う「情報宣伝局」、イベントの企 画・運営を行う「企画局」、子ども向けの イベントを企画する「子どもフェスティバ ル局」、当日の交通整理や清掃、ごみの リサイクルなどを扱う「事務局」、3回生 で構成され1・2回生の仕事の補佐を行う 「総括局」、委員長・副委員長・会計で構



祭大級のイッサイガッサイ 輝甍祭(11月4日~6日)

成される「三役」です。どの局も男女や 回生問わず、輝甍祭を成功させるという 目標のもと一致団結して活動しています。

大学祭実行委員会は、年間を通して大 学祭 (輝甍祭) の準備を行っています。前 期では、大学祭当日にイベントや展示・研 究発表を行ったり、模擬店を開いたりする 団体と週に1回集まり、当日に向けて会議 を行いました。委員会内でも、先ほど挙げ た局ごとに毎週話し合いの場を設け、大学 祭に向けて準備を進めています。夏休みで は、長期休暇を利用して、大学祭の装飾 やイベントに必要な看板や大道具などを 製作する作業を毎日行いました。また、仕 事だけでなく、夏合宿を開催し、委員会内 での交流を深めたり、日々の夏作業の疲れ を癒したりもしました。後期に入ると、本 番約1カ月前ということもあり、各団体との 会議をより綿密に行い、物品製作などもラ ストスパートを迎えます。本番当日は、そ



自然環境教育センター奥吉野実習林での夏合宿

れぞれの仕事を進めながら、奈良教育大 学の学生として大学祭を楽しみます。本番 終了後に味わう感動は、こうして1年間活 動をしてきたからこそ味わえるものです。

このように、大学祭実行委員会全員が 一丸となって、輝甍祭を成功させるため 日々活動をしています。一つの目標に向 かって進んでいく中で味わう感動や経験 は、何事にも代え難いものとなるでしょ う。大学祭実行委員会だけでなく、他の 委員会や部活動・サークルなどの課外活 動でも、そうした感動や経験を味わうこ とができます。大学生活を有意義にする ためにも、そうした活動に参加してみて はいかがですか。

活躍する奈教生

文化系

書道科

- ◆ 第16回全日本高校·大学生書道展 団体賞 【優秀校第2位】
- ◆ 第16回全日本高校·大学生書道展 個人賞【全日本高校·大学生書道展大賞】

小島美春さん(大学院 2回生) このだのりかず 米田敬一さん(大学院 2回生) ^{なくまかりようでい} 福岡良祐さん(教育学部 2回生)



小島美春さん



こめだのりかず 米田敬一さん



福岡良祐さん

進硬式野球部

. | | |準硬式野球連盟 ◆ 西都六大学準硬式野球連盟 春季リーグ戦 【ベストナイン】

かん ぼ まきひろ 神保全宏さん(教育学部 4回生) 坂本克貴さん(教育学部 2回生)

弓道部

第49回近畿地区国立大学体育大会 優勝 男子 【第3位】

男子ハンドボール部

第49回近畿地区国立大学体育大会 【第2位】

女子ハンドボール部

回近畿地区国立大学体育大会 第3位

49回近畿地区国立大学体育大会 女子【第3位】

男子バレーボール部

回近畿地区国立大学体育大会 第3位

体育系



神保全宏さん



坂本克貴さん

ソフトテニス部

◆ 第54回全国教育大学ソフトテニス大会 女子団体戦 【第3位】

女子サッカー部

◆ 第49回近畿地区国立大学体育大会 【第3位】

東日本大震災関連

7月27日



現地の様子を説明する根來准教授

教育復興支援ボランティア派遣 事前研修会開催

教育復興支援ボランティアとし て派遣される予定の学生を対象 に、事前研修会を開催しました。

初めに長友学長より、「今回の

経験は、教師や社会人になって必ず役立つものです。現地での 経験をしっかりと心に刻み、戻ってきてからきちんと周囲にその 経験を伝えて欲しい」と激励の言葉があり、その後、現地での 活動を既に経験している本学教員2名による講義(現地の様子 について・子どものこころの理解とケア)が行われました。



現地で学習補助をする派遣学生

7月30日~8月6日

教育復興支援 ボランティア第一次隊派遣

宮城教育大学教育復興支援センターとの連携の下、 東日本大震災で被災した地域の学校等において、学習 補助等を中心とした教育復

興支援活動を行うボランティア学生8名を宮城県へ派遣しま した。(詳細は特集記事参照)

6月15日

護身術指導を受ける参加者

防犯講習会を開催

奈良警察署より警察官を講師に招き、 留学生・学生宿舎入 居学生を対象にした 防犯講習会を開催しました。

講習会には約30 人が集まり、日常被

害に遭いやすい犯罪、知らず知らずに加害者になってしまう行動 など注意すべき点、また実際に被害に遭った際に取るべき対応な どについて、護身術指導も含めて説明していただきました。

7月17日

ユネスコスクール研修会~世界遺産教育講演会を開催



挨拶をする長友学長

文部科学省、本学が主催となり、ユスクール研修会〜世界遺産が開催されました。この研修会は、世界遺産教育についてより理解を深め、教育現場で、また日常においても実践・

推進することを目的としており、県内学校教職員を初め、約130名の参加者で会場は満席となり、成果のある研修会となりました。

7月30日



なっきょんも登場!



配布されたリサイクルペン (P.19 参照)

オープン・キャンパス2011を開催

オープン・キャンパスが午前・午後の2回にわたって開催され、高校生ら約1,300名が大学を訪れました。

揃いのTシャツを着た学生スタッフが、受付や案内に活躍し、司会進行役も務めたほか、ギター・マンドリンクラブによる演奏もあり、学生と教職員が一体となった活気あるオープン・キャンパスが繰り広げられました。

実験を指導する本学学生

8月25日~28日

「サマースクール2011 イン曽爾」開催

本学理数教育研究 センターは、県下山 村部にある曽爾小中 学校においてサマー スクールを開催(曽 爾村との連携協力事

業)。理科・数学への興味関心が引き出されるような授業を大学生・教員が企画・実施しました。小中学校では普段できない理科・数学の実験などを目の当たりにした児童・生徒らは、驚きと感動を胸に授業に取り組んでいました。



平成 24 年度入試日程のお知らせ

教育学部は、平成24年度(2012年4月)入学者から、総合教育課程の募集を停止し、教員養成を中心とする学校教育教員養成課程を再編します。詳しくは大学ホームページ[受験生の方へ]をご覧ください。

入試区分				出願期間	試験日
教育学部 -		地域推薦*		12月5日(月)~ 12月9日(金)	1月17日(火)
		一般推薦			1月18日(水)
			前期日程	1月23日(月)~	2月25日(土)
		後期日程		2月1日(水)	3月12日(月)
大学院教育学 研究科	修士課程		2 次募集	1月16日(月)~ 1月20日(金)	2月11日(土)
	専門職学位課程		2 次募集		2月12日(日)
特別支援教育特別専攻科			2 次募集	1月20日(金)~ 1月26日(木)	2月12日(日)

[※]地域推薦入試は、奈良県内高等学校を卒業(1年以内)又は卒業見込みの者で、将来奈良県下の学校教員として活躍する強い意志を持った者を対象にした推薦入試です。

雑 草

今回は雑草である。しかし、雑草と言う名の植物はない。 人間の生産にそぐわない植物が雑草と呼ばれている。本学では、図書館南側などの「研究・教育のための保存緑地」に雑草が茂る。そこではアザミなども見られるがイネ科やカヤツリグサ科草本が伸び、秋にはコオロギやキリギリスなどの綺麗な鳴き声を聞くことができる。姿を消したスズムシに戻って来てほしいものだ。奈良公園に広がるシバ地も、シカが少ない時代には雑草が伸びていた。

本学の雑草も秋には刈られてしまうが、春にはカタバミ



チカラシバやエノコログサが目立つ緑地

やタンポポなど多くの花が咲く。その後は雑草が伸び、花を隠してしまう。一年を通して花を見るには、草刈りは欠かせない作業である。だが、その花も近年は草丈が低く、花の少ない時期もあり、授業に支障が出始めている。シカの採食か、過度な草刈りのためだろうか。学内には近隣の幼稚園児や保育園児が昆虫や植物採集に来ている。花摘みの場は本学の財産であり、大事にしたいものである。

※本センター奥吉野実習林は、台風12号の影響により、土砂ダムの 決壊等の恐れがあり、現在施設の利用を休止しております。

[※]入試に関するお問い合わせ先:入試課 TEL 0742-27-9126



夜の二月堂。 ライトアップされており、 また高台にあるので 夜景がきれい。



国際学生宿舎北寮屋上 から見る夕日が最高。 バーベキューなどしながら 楽しんでみては。

神保 全宏さん(身体・表現 4回生)



奈良奧山ドライブウェイで 若草山頂上まで 上がったところから見える 夜景がとてもきれい。

加東 遼さん(科学情報 3回生)





大学周辺の オススメスポット



緑美しい奈良公園が広がり、歴史 と文化に恵まれた、すばらしい 環境に位置する奈良教育大学。 そんな大学周辺のオススメスポット を聞いてみました。



ならまち。 昔の明媚な町屋の 町並みが残っており、 とても落ち着きます。

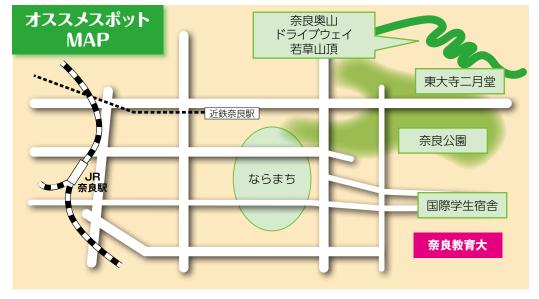
ふくぉか りょうすけ 福岡 良祐さん(文化財・書道芸術 2回生)



_{ふかまち しょうご} <u>深町 昇悟さん(科</u>学情報 1回生)

鹿せんべいも

あげられます。





弊誌に関するご意見・ご感想をお寄せください。 QR コード対応の携帯電話にてアンケートに回答 いただくことができます。

皆様からのご意見・ご要望お待ちしております。



広報誌づくりなど、広報活動を手伝ってくれる 学生広報スタッフを募集しています。 興味のある方は企画・広報室まで、 お気軽にお問い合わせ下さい。



奈良教育大学 広報誌 『ならやま』

第38号 平成23年10月31日 編集/広報·情報公開委員会 発行/国立大学法人奈良教育大学 3月.7月.10月各下旬発行

〒630-8528 奈良市高畑町 TEL.0742-27-9104 FAX.0742-27-9141 Email: kikaku-kouhou@nara-edu.ac.jp ※広報誌「ならやま」は大学ホームページからもご覧いただけます。

http://www.nara-edu.ac.jp/